

國學院大學學術情報リポジトリ

幼児期の教育から小学校教育への言語指導の円滑な
接続に関する一考察：
ベルギー・フランダースのフレネ教育の実践から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉永, 安里, 岡本, 拓子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001396

幼児期の教育から小学校教育への言語指導の 円滑な接続に関する一考察

—ベルギー・フランダースのフレネ教育の実践から—

吉永 安里 岡本 拓子

【要旨】

本研究は、ベルギー・フランダースのフレネ教育において、幼児期の教育から小学校教育への言語指導がどのように実践され、接続が図られているかを明らかにし、日本の言語指導における円滑な幼小接続への示唆を得ることを目的とする。フランダースの3校のフレネ学校における日本の幼稚園年長児と小学校1年生にあたるクラスを観察し、教師へのインタビューを実施した。その結果、フレネ学校では幼児期の教育と小学校教育共に、子供の主体的な活動や学びの中で生じるコミュニケーション、自由テキストを通じた言葉による自己表現、サークルでの自己表現や対話を大切にしていることが分かった。このように学びの形態を幼小共通にする一方で、学びの内容や指導の方法は子供一人一人の発達に応じた「自然な学び方」を重視することで、幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図っていることが明らかとなった。

【キーワード】

幼小接続 言語指導 フレネ教育 主体的な活動や学び 自由テキスト

1. 研究の背景

1-1. 今、幼小接続に求められていること

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続は、平成29年の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小学校学習指導要領同時改訂（改定）の大きな柱の1つとなっている。幼児期の教育を通して「育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われる」（文部科学省, 2017a；厚生労働省, 2017；内閣府, 2017）こと、小学校教育において「幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮」（文部科学省, 2017b）できるようにすることが求められている。

その背景には、小学校低学年の発達を考慮した生活科の導入や、同時期に社会問題となった「小1プロブレム」の解決に向けて幼小連携の取り組みが行われたにもかかわらず、多くの学校・園が、子供や教員の交流に比べ教育課程の接続がまだまだ十分とはいえない状況（文部科学省, 2016）がある。国立教育政策研究所（2015）は、こうした状況に鑑み、幼児期の遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎とし、小学校においても主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していく「スタートカリキュラム」を提案した。その基本原則として、①幼児期に親しんだ活動を取り

入れ、分かりやすく学びやすい環境づくりをする、②幼児期からの学びと育ちを生かす活動や環境を意図的に設定し、自信や意欲をもって活動し自己発揮し、先生や友達に認められることで自己肯定感が育まれるようにする、③子供主体の学習活動を展開し、自分で考え、判断し、行動することを繰り返す中で自立に向かうようにする、という3つの柱を掲げている。

今回改訂の小学校学習指導要領においては、円滑な接続を実現するスタートカリキュラム策定が求められ、令和2年度の全面実施に向けて各校取り組みを始めている。

1-2. 主体的な活動や学びを大切にした幼小接続

先述のように、スタートカリキュラムでは、幼児期の学びを生かす活動や環境を設定し、子供の主体的な自己発揮や他者に認められる経験を大切にすること、そして子供主体の活動による学びの自立を図ることが求められる。主体的という言葉は平成29年度改訂の幼児期の教育の3要領・指針及び小学校学習指導要領に類出し、幼小共に子供の主体性が重視されている。主体性の重視は、幼稚園から高校までの全要領において「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められたことから明らかである。中央教育審議会（2016）は、「主体的な学び」を以下のように位置付けている。

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

こうした主体的な学びを幼児期から小・中・高と一貫して保障する中で、資質・能力が連続性・一貫性をもって育成されていくのである。

1-3. 言語指導の重要性

しかし、幼児期の教育から小学校教育の接続にあたっては、子供が使用したり、教師が指導したりする言語の性質に差異があり、それが円滑な幼小接続を実現する上での難しさの要因の1つとなっていることが、多くの研究において指摘されてきた（例えば、岡田, 1998；岡本, 1985）。幼児期の教育においては、親しい人との親密な関係に基づいた文脈依存の話し言葉が用いられ、小学校以降は不特定多数に向けた文脈独立のパブリックな話し言葉と書き言葉が要求されるからである。

一方、言語は知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成にかかわる重要な役割を果たしており（文化審議会, 2004）、幼児期の教育から小学校以上の教育を通して言語指導の充実を図る必要性は疑いの余地がない。さらに、文部科学省（2007）は、子供を取り巻く環境の変化や、様々な思いや考えをもつ他者との対話の機会が乏し

くなっていることから、言葉に対する感性を磨き、言語生活を豊かにすること、幼・小・中・高等学校における幼児児童生徒の発達の段階に応じて、言語による理解・思考・表現などの方法を身に付けさせる教育内容・方法について検討の必要があるとする。

これを受け平成20年の学習指導要領改訂において言語活動が重視されたものの、言語能力低下への危機感はさらに高まり、平成29年の小学校学習指導要領（前掲書）では「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること」、幼児期の教育の3要領・指針でも「幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること」とされ、幼小双方の言語指導の充実が喫緊の課題となっている。

2. フレネ教育から言語指導の円滑な幼小接続を考える

では、子供の発達を踏まえた言語環境や言語活動をどのように充実し、言語指導の円滑な幼小接続を実現すればよいのだろうか。その足掛かりを得るため、フレネ教育に着目することとした。

フレネ教育とは、セレストアン・フレネ（1896-1966）によって始められた新教育運動の1つである。1920年、フランスBar-sur-Loupの学校のアシスタントマスターとして学校印刷¹⁾の活動を学校に取り入れ、1934-1935年にはVenceにフレネ学校を開いた（Legrand, 1993）。Venceのフレネ学校には幼小が同じ敷地内に併設されている。フレネ（1984）は就学前教育の重要性や決定的な意義を強調し、「年少の子供たちは豊かで「援助的」環境の中におかれることが必要」であり、その中で「実験してみたり、探したり、調べたり、試してみたり」することが大切だとする。幼稚園についてフレネ（前掲書）は、「どんな形のものであれ、また魅力的なレッスンであっても、われわれは授業ということは全然行わない」としている。そして、「自然的環境なしに、幼稚園は存在すべきでない」し、「〔自然的環境〕に機械による活動、知的活動、芸術的活動が付け加えられること（〔 〕内筆者）」が必要だとしている。機械による活動とは様々な道具を使用する活動であり、知的活動とは、ことば、描写、書き、複写と印刷、読みである。自然的環境の重要性と共に、言語活動が知的活動の中で重視されていることが窺える。また、芸術的表現の活動としてイラスト、彩色画、紙版画、リノリウム版画、歌、リズム遊び、指人形、劇、操り人形などを挙げ、「芸術的活動についていくら強調しても、その地位は誇張にならない」とその重要性を強調する。こうしたフレネ学校の幼児期の教育内容は、時代や文化による違いはあるものの、現在の日本の幼児期の教育の理念と一致する点が多い。一方、フレネ学校特有の方法として、小学校では、教師が文法、算数、作文、歴史、地理、科学等について年間の全体的プラン、月間のプランをあらかじめ立てるが、子供自身がその枠内で教師の協力を得て一週間ごとの個人プラン「学習計画表」を作成し、自らの学習を一週間ごとに自己評価しながら自立的に学習を進めることを重視している点が挙げられる（フレネ, 前掲書）。幼稚園でも学習計画はあるが、最低限の集団的規律に関してのみ行うとしている。

フレネ学校の教育技術の特徴について瓦林（2018）は、以下のように述べる。

フレネが開発した教育技術は、そのすべてが複合的な関係にあり、子供たちの主体的かつ協働的な学びを支えるために不可欠なものである。子供たちの豊かで自由な自己表現を促す「自由テキスト」（Texte libre）、テキストを皆で読み合ったのちに一番良かったと思うものを選ぶ「テキストの選択」（Choix du texte）、選ばれたテキストをまとめて冊子にする「学級文集」（Journal scolaire）、文集を別の学校と交換し交流し合う「学校間通信」（Correspondance scolaire）、個別学習と自己・他者評価を行うための「学習計画表」（Plan de travail）、各自の個別学習を支えるための「学習カード」（Fiches de travail）と「学習文庫」（Bibliothèque de travail）、各自の興味関心をもとにしたテーマに基づいて研究した成果を皆の前で発表する「コンフェランス」（Conférence）、学校生活の中での意見を集約するための「壁新聞」（Journal mural）、壁新聞をもとに週1回の話し合いを行う「学校協同組合の会議」（Réunion coopérative）などがあげられる。

フレネ教育は子供の主体性や協働性を重視し、知識・技能を詰め込む系統性重視の伝統的學校を批判し、一人一人の子供の発達に合わせた「自然な学び方」（フレネ, 2015）を大切にして、子供の自由な表現の中に芽生える言語的表現から読み書きにつなげていく指導方法をとる。

3. 研究の目的

こうしたフレネ教育の考え方は、現在日本において求められている主体性と言語能力の向上を重視する教育と通底するものがあると考えられる。そこで本研究では、フレネ教育の実践を考察することを通して、日本における言語指導の円滑な幼小接続の在り方について示唆を得ることを目的とする。また、調査にあたっては、ベルギー・フランダース（オランダ語圏）を選定した。これは、現在日本において、子供を様々な取り巻く環境の変化から言語能力が低下している状況に加え、2019年の出入国管理及び難民認定法の一部改正により今後さらに外国人労働者が増え、外国人児童を日本の教育現場で受け入れていくことも考慮しなければならない状況が散見されるからである。様々な背景により乏しい言語環境下に置かれている子供たちをも含めた、幼小の言語指導の充実とその円滑な接続を考察するには、多様な言語環境下にあるフレネ教育の指導の在り方を検討する必要があると考えた。

ベルギー・フランダースは多くの移民や難民を受け入れ多文化状況に直面しており、かつフレネ教育の可能性に着目して現在非常に多くのフレネ学校が存在する。フランダースの学校視察官であったDevos（2016, 2017）によれば、Venceのフレネ学校の開設以降、フレネ教育は世界中のフレンチ・スクールに広まり、ベルギー国内でも増えていったが、1970年代まではフランス語を使用するワロン地方に留まっていたという。ところが、伝統的な教育からの反動としての進歩

主義教育への関心が高まり、オランダ語圏のフランダースにおいてもフレネ教育が注目をされるようになると、1979年にフランダース初のフレネ学校 ‘The Appeltuyn’ が設立され、それ以降フレネ学校の数は急増、2014年には82校、オルタナティブスクールのほぼ半数がフレネ学校という状況になり、現在も数を増やしているという。

4. 研究の方法

4-1. 調査協力校の概要

言語環境の異なるフランダースのフレネ学校3校において調査を実施した。調査協力校等の概要は表1の通りである。また、3校の特徴は以下の通りである。

表1 調査協力校の概要

学校	地域	学級	調査日	学級人数(約)	インタビュー対象者
①フレネ学校K	オーストカンブ	Kleuter3年生	2019.2.13	20名	校長（コーディネーター）、 年長クラス担任、1年生担任
		1年生	2019.2.13	21名	
②フレネ学校M	гент	Kleuter	2012.2.14	24名	校長（ディレクター）、 幼児クラス担任、1年生担任
		第1生活グループ	2012.2.14	18名	
③フレネ学校V	гент	第1生活グループ	2012.2.15	24名	5・6年担任、 幼児クラス担任、1年生担任
		第2生活グループ	2012.2.15	24名	

①フレネ学校K

オーストカンブの閑静な住宅街に位置し、森や池を含む広大な敷地をもつ。教室は古い邸宅を改築して使用している。周囲はベルギー人の中流階級が住む地域で、大部分が両親ともにベルギー人、外国籍の子供は3名のみ、2歳半～12歳の190名弱の子供が通う。

幼児クラスは2歳半～6歳で年齢ごとに分かれており、各学級20名定員で4学級ある。Peuter²⁾（2歳半）1学級（誕生日を迎えた子が順次入ってくるため20名より少なく、調査当時12名）、Kleuter³⁾1年生（3・4歳）1学級、Kleuter2年生（4・5歳）1学級、Kleuter3年生（5・6歳）1学級という学級編成である。小学校は変則的な異年齢学級で定員20名、6学級ある。1年生（6・7歳）1学級、2・3年生（7～9歳）2学級、4・5年生（9～11歳）2学級、6年生（11・12歳）1学級である。

②フレネ学校M

гент旧市街地からほど近くの外国人集住地域にある。生活保護世帯が暮らすマンションも校区内にある。在校生の約90%がオランダ語を母語としない子供であり、約25か国の国籍の子供が在籍する。トルコ、ブルガリアが最も多く約70%、その他ヨーロッパ、中東、アジア各国である。2歳半～12歳まで250名弱の子供が通う。

幼児クラスは2歳半～6歳の異年齢学級で、1学級18名～24名のKleuterが4学級ある。小学校は2学年ごとの異年齢学級である。日本の小学校1・2年生にあたる第1生活グループ（6～

8歳)のみ定員18名で3学級、日本の小学校3・4年生にあたる第2生活グループ(8~10歳)は定員24名で2学級、日本の小学校5・6年生にあたる第3生活グループ(10~12歳)も定員24名で2学級ある。

③フレネ学校V

鉄道駅から徒歩5分、学校を挟んで駅側は商業地域、駅と反対側は閑静な住宅地である。駅側の地域はトルコ人の集住地域であり、反対側の住宅地には中産階級のベルギー人が多く住む。在校生の約80%がベルギー人、外国籍の子供が約20%いる。10年前は多様な国籍の子供がいたが、現在はトルコとブルガリアのみとのことである。2歳半~12歳まで約360名が在籍する。

幼児クラスは2歳半~6歳の異年齢学級であるが、M校とは異なり幼児クラスを第1生活グループと呼び、1学級18名~24名で6学級ある。小学校は2学年ごとの異年齢学級で、第2生活グループ(6~8歳)が定員24名で3学級、第3生活グループ(8~10歳)が定員24名で3学級、第4生活グループ(10~12歳)が定員24名で3学級ある。

4-2. 調査・分析方法

自然観察法により、幼児期の教育最終学年を含む学級と小学校教育初年次の学年を含むクラスの言語指導場面を観察した。データの収集方法は、VTRと写真撮影による映像記録と、調査者2名のフィールドノートへの記録である。観察後、担任教諭及び校長に20分程度の半構造化インタビューを行い、言語指導のねらいや評価方法、本時の指導の典型性、子供の言語的背景、幼小接続への意識等について質問を行った。観察及びインタビューデータを基に、言語指導の幼小接続の特徴について解釈的分析を行った。

4-3. 倫理的配慮

VTR・写真撮影については、調査校の校長、対象学級の担任教諭の了解を得た。また、子供の保護者には調査校を介して事前に調査内容を通知し、同意を得た。

5. 各校の言語指導場面の特徴と考察

各校の言語指導の内容と方法、そして幼小接続の特徴について解釈的分析を行った。

5-1. フレネ学校K

(1) Kleuter 3年生

①好きな活動

子供たちは、登園すると自分の好きな場所(校舎内、校庭)に行き、工作、編み物、ごっこ遊び、かくれんぼ、三輪車等をしていた。どこで何をしてもよいため、隣の幼児クラスや小学生のクラスへ行く子、校庭に出ていく子もいた。

[K校 Kleuter 3年生の1日の流れ]

8:30~9:00 登園し、好きな活動をする。

9:00~9:40 サークルで話をする。

9:40~10:00 好きな活動をする。

10:00~10:30 屋外遊びをする。

10:30~10:50 サークルでおやつを食べる。

10:50~11:30 好きな活動の続きをする。

11:30 降園する。

また、好きな活動は、サークルの時間を挟んで再度行われた。平らに伸ばした粘土の土台にビーズを貼ってネックレスの模様を製作していた子供は、友達に「本当のネックレスにしたらいんじゃない」と言われ、教師と相談して針金を通して本物のネックレスを作っていた。また、下絵にピンを刺して柄を作っている子供もいた。製作だけでなく、サークルで話すためにもってきたベイブレードで友達と一緒に遊ぶ子、明日地域で行われる環境デモ運動（“minder auto meer fiets” = “Less Cars More Bicycles”）のプラカードを作成する子など様々な活動が見られた。

②自由テキスト⁴⁾

また、好きな活動の1つとしてフレネ教育の特徴的指導法である自由テキストに取り組んでいる子供もいた。K校では午前中の好きな活動の中で、取り組みたい子供ができるようにしていた。自由デザイン⁵⁾だけでなく表したいことを子供自ら文字で表現しようとする様子も観察された。綴りがわからず、教師に尋ねながら自分で書く子もいれば、まだ単語や文を自分で書くことは難しく、担任に書いてもらっている子もいた。



写真1：自由テキストの様子

③サークル⁶⁾

クラスの子供が全員登園すると思いつきの席に座り、サークルが始まった。一人目は、家から連れてきたコリーの子犬について話した。最近飼い始め、大切にしているとのことであった。話の後、担任は餌を食べる様子を子供たちに観察させ、固い餌を食べる音から犬の歯がどうなっているか予想を立てさせ犬歯の特徴を確認したり、水を飲む様子から舌の使い方を考えさせたりした。また、子犬が何に興味を示すか発表者に尋ね、犬が好きなおもちゃで遊ぶ様子を観察した。その後も3名が、家から持ってきたスケーター、スライム、ベイブレードについてそれぞれ話をし、遊び方を実演した。他の子供は発表者に質問をし、発表者はそれに答えるが、うまく説明できない子、声が小さい子もおり、担任が代弁したり再度質問をし直したりしながらサークルを展開していた。

担任へのインタビューでは、朝のサークルには毎日3、4人のトーク担当があり、曜日によって異なるテーマ（自然について、哲学について、自分の好きなものなど）について話すということであった。観察した日は「自分の好きなもの」がテーマであった。また、降園前にもサークルを行うことがあるが、日によって行ったり行わなかったりするということである。Kleuterの子供は毎日主体的な活動をしており、その遊びはその日のうちに完結するわけではなく、翌日も続きをする場合もある。2～3日から1週間程続く場合もあり、観察した日の活動の多くは翌も行われることが予想されたため、この日は降園前にサークルを行わず、後日、活動について発表するサークルの時間を設けるとのことであった。

（2）小学校1年生

①サークル

朝のサークルでは歌を歌った後、一人一人今日やりたい活動を順番に言っていた。中にはなかなか言い出せない子もおり、担任は質問を重ねながら話すのを待っていた。自分の番が待ちきれず話し始めてしまう子には、順番を待つように伝えた。その後、好きな活動に移行した。

2回目は好きな活動の後に行われた。全員が自分の活動について発表し、友達に意見や感想を求めたり、質問に答えたりした。指編みをした子供は作品を見せ、何メートルあるか質問が出たため、みんなで長さを測った。また、絵本を作った子供は、「この絵は何でしょう？」と文字を隠してクイズを出し、周りの子供たちがそれに答えた。誰が話しているのかを明確にするために、発表者が小石を持ち、その子供に意見や質問のある場合は手を挙げて、石を渡されたら発言してよいという方法をとっていた。

3回目は、外遊び後に行われた。子供たちは好きなところに座り、おやつを食べながら友達とおしゃべりして全員が集まるのを待ち、集まると、担任は“De Frutsels”の本の読み語りを始めた。章立てのある、文字が多く挿絵が少ない本のため、子供たちは担任の語りを集中して聞き、担任も内容理解を促すためジェスチャーをつけたり、声の調子を工夫したりしながら語っていた。1章読み終わると、最後に挿絵を見せて語りを終了した。

②好きな活動

1回目のサークルの後、サークルの部屋の隣にある学習スペースや階段を半分降りたところにある踊り場スペースなど、子供たちは好きな場所で朝のサークルの時間に話した活動を行った。単語が書かれた紙を大きな用紙に貼って文を作り、友達と一緒に声に出して読み合ったり、王冠や消防自動車の形が描かれたボードを見ながら自分で同じように描いたり、算数の数の分解のワークをしたり、魚の形に模られたフェルトの布を糸で縫ったり、一人一人のしたい活動を自ら選んで取り組んでいた。

③自由テキスト

小学校でも自由テキストは、好きな活動における1つの活動として、取り組みたい子供が取り

〔K校 小学校1年生の1日の流れ〕

8：45～8：55	登校後、サークルで話をする。
8：55～9：30	好きな活動を行う。
9：30～10：00	サークルで話をする。
10：00～10：30	屋外遊びをする。
10：30～10：40	サークルでおやつを食べる。
10：40～10：50	絵本の読み聞かせを聞く。
10：50～11：30	絵本を読む。
11：30	下校する。



写真2：3回目のサークル

組んでいた。PCで文章を打ったり、内容に合う絵を描いたり、ネット上の画像を探してコラージュしたりして仕上げていた。自由テキストはパソコンでも手書きでもよいとのことであった。

④読みの学習の時間

読み語りの後、子供たちは本棚から自分用の絵本を取り出し、学習スペースに移動した。本は子供のレベルに合わせてあらかじめ決められている絵本である。これまで読み終わったところにしおりのマークが挟んであった。

学習のねらいは内容理解やお話を楽しむことではなく、単語を見て正しく発音できるかどうか、単語や文が流暢に読めるかどうかであった。確認は、親が来られる家庭は親が子供の音読を確認したり、プラスチックのパイプを利用して微音読した音を自分の耳で聞いたりしていた。またこの時間に、担任は1人あたり1週間に1回行われる単語の読みの能力を評価していた。方法は、単語のリストについて3分間でいくつ正しく読めるかを行い、棒グラフにして子供に成長が分かるようにするというものである。正しく読めていない音やその他気付いたことについても、教師用評価資料に記載をしていた。

(3) K校の言語指導の幼小接続の特徴

K校の幼児期の教育の特徴は、子供が自由に屋内外の環境から主体的に活動を選択したり創造したりできるようにしていることであった。そしてその主体的な活動を通して、友達と関わる力、表現する力、言語能力を育てていた。また、主体的な活動だけでなく、クラスで集まってのサークルや自由テキストといった決められた活動の中でも、話し言葉や書き言葉を用いて友達や教師と思いや考えを伝え合う経験を大切に、言葉が育まれるように配慮していた。そして、小学校教育においても子供たちは自分で活動を選択し、活動の場所も内容も、あるいは一人で学ぶか友達と学ぶかなどの方法も自分たちで考え、行動する主体的な姿が見られた。また、サークルや自由テキストといった幼児クラスと同じ活動や方法を取り入れながらも、小学校では内容についてより深い質疑を行ったり、話し言葉だけでなく書き言葉も子供自身が用いて表現したりして、言語能力が高められていることが分かった。一方、幼児期の教育と大きく異なったのが、文字言語習得のための集中的な学習の時間があったことである。子供は自分用の絵本を、フォニックス⁷⁾の学習で学んだことを生かし、単語や文を読んだり、内容を理解したりしようとしていた。また、教師が定期的の子供の単語の読みの正確性、流暢性を評価している様子が観察されたが、これは幼児クラスでは行っていないということで、小学校から正式な文字の読み書き指導が開始されることがインタビューから明らかとなった。ただ、この自覚的な読み書きの時間においても、一人一人のテキストは個人の言語能力と興味に合わせて教師と共に自分で選び、学び方も学ぶ場も、学ぶスピードも子供自らが決定し、主体的に学ぼうとする姿が見られた。

K校では幼小共通して子供の主体性や自己決定が大切にされ、決められた活動もサークルや自由テキストのように、子供が幼児期から慣れ親しんだ共通の方法を用いながら、話の内容をより高度で複雑な内容にしていたり、思いや考えを絵や製作物だけの表現から文字も使って表現す

るようになったりと、育ちに合わせて内容や方法を高度化することによって円滑な幼小接続を図っていることが示唆された。

5-2. フレネ学校M

(1) Kleuter

①共通の創作活動

朝のサークルで、Vita Mike（以前学校にきた、栄養素やバランスの良い食事などについて教えてくれるキャラクター）について話が出たため、その後、みんなでVita Mikeの絵を描いたり、工作で作ったりする創作活動を展開した。この時間は、子供によって選択した表現方法は絵や工作等異なるが、テーマは共通であった。

②好きな活動

午前のクラスでは戸外遊びの後、室内に戻って好きな活動を行っていた。読み聞かせを聞きたい子供は教師に頼み、小グループで聞いていた。木製の人形のパズルや針でドットを打って絵を描いている子、水彩画を描いている子供もいた。午後のクラスでも戸外遊びの後、1時間ほど一人または小グループでおままごと、パズル、レゴなど好きな活動を行っていた。

③自由テキスト

今回の調査中には自由テキストを書いている子供は見られなかった。そこで教師に自由テキストをどのように扱っているか、また、文字の読み書きの指導過程について質問した。自由テキストを書くのは好きな活動をする

時間で、子供が描いた絵や作った作品についての話を教師が聞き取り、パソコンでテキストを作成したものに、子供がさらに絵などを加えて完成させている。読み書き指導に関しては、まず名前については教師が書いた見本を用意し、それを見て自分の製作物に写している。その他の文字や単語は、まず自分の名前を構成する文字（たとえば“Amina”であれば、A/M/I/N/A）を色分けし、自分の自由テ



写真3：Vita Mikeの絵

〔M校 Kleuterの1日の流れ〕

8：00～8：20 順次、登園し、好きな活動をする。

8：20～8：40 サークルで話をする。

8：40～9：40 共通の創作活動をする。

9：40～10：00 サークルでおやつを食べる。

10：00～10：30 戸外遊びをする。

10：30～11：30 好きな活動をする。

11：30～12：00 サークルで話をする。

12：00～13：30 昼食後、屋外で遊ぶ。

13：30～15：15 好きな活動をする。

15：15～15：30 サークルでおやつを食べ、音楽を聴く。

15：30 順次、降園する。

※11：00から観察を行ったため、それ以前の活動は教師のインタビューから再構成した。また、午前と午後で異なる2クラスを観察した。

キスト内の対応する文字を同じ色に塗って識別するところから始め、ターゲットの文字を変えながら徐々に識別できる文字を増やしていく。単語の理解や書き取りに関しては、週のターゲット単語をスタンプで押したり単語を写したりして、少しずつ自分で書けるようになっていく。まず子供が自由デッサンや自由表現を楽しみ、その表現についての思いや考えを話し言葉で伸び伸び表現することを大切に、その表現を教師が聞き取って文字に表すところから子供自身が文字を用いて表現することへの興味付けをする、一人一人の発達や経験に合わせた「自然な学び方」を重視しているとのことであった。

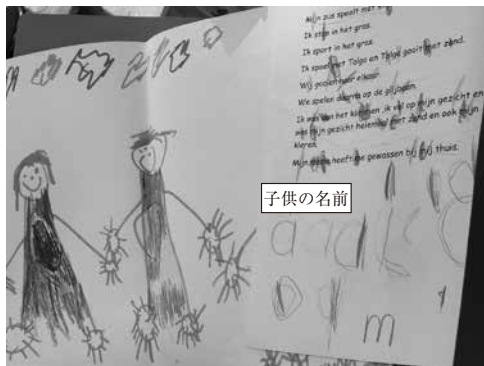


写真4：自由テキストの例

④サークル

サークルは、朝、昼食前、降園前に行われた。朝は、共通活動の導入としてVita Mikeについて話をした。また、昼食前には午前中に取り組んだ作品についてみんなの前で発表し、何をどのように工夫して作ったのか等、説明していた。作品を見せた子供はサークル内を回って作品を友達に見せ、見た子供は意見を言ったり、グーサインを出したりしていた。教師の意図としては、毎日のサークルを通して、取り組んだことに自信がもてるようにしているとのことであった。降園前のサークルでは、おやつを食べ、その間、楽器（チェロやトランペット等）に注目させながら3曲ほど音楽を聴いた。その後、絵本の読み聞かせを行う予定であったが、時間がなく、すぐに降園となった。

(2) 第1生活グループ（6～8歳の異年齢学級）

①サークル

サークルは、朝と午前の途中で観察された。1回目は子供たちがその日取り組みたいことを発表し、好きな活動につなげていた。2回目は、個別の活動で行ったことを全員が報告していた。

②好きな活動

M校では“Mij Tijd Werk” = “Me Time work”と呼ばれていた。教師と

〔M校 第1生活グループの1日〕

8：00～8：20	好きな活動をする。
8：20～8：50	サークルで話をする。
8：50～9：10	好きな活動を行う。
9：10～9：20	サークルで話をする。
9：20～9：30	一斉の活動を行う。
9：30～9：55	好きな活動を行う。
9：55～10：00	一斉の活動を行う。
10：00～10：20	おやつ→戶外活動（以降、不明）

1対1で文字の発音練習や発音された単語に対応する文字カードを取り出したりするフォニックスの活動や、教師の読み上げた指示（「赤い□の下に青い○を置きなさい。」等）に沿って図形を並べる言葉と図形の理解を確認する活動、黒板の単語（共通学習用の自由テキストにあるターゲッ

トの単語)を書き写す活動、足し算・ひき算の活動など、様々な活動が行われていた。活動は、子供自身が学習計画表を見て決め、1週間で全活動を達成できるようにしていた。

③一斉の活動

今週の自由テキストが共通教材として板書され、そのテキストについて全員が1週間、音の学習、単語の学習、読みの学習を行うという方法をとっていた。好きな活動の中で、数名の子供たちが音の学習や単語の書き取りを行っている姿が見られたが、一斉の活動では、まず共通テキスト内のターゲットの音（今週は“ui”）と、その音の入った単語を読む練習をした。その後、子供たちは共通テキストの内容に合わせてジェスチャーをしながら音読し、筆者の名前のところは、一斉に筆者であるクラスメイトを指さして、大きな声でその子の名前を呼んでいた。共通テキストの選定と学習の方法については教師にインタビューから以下のことがわかった。

- a) 毎週金曜のサークルで全員が自由テキストを紹介し、来週学習する共通テキストを決める。
- b) 教師が共通テキストとしてプリントにする。
- c) 子供はbを共通学習用ノートに貼り、テキストのイメージ画を描く。(文章を可視化する言語活動であり、理解度も把握できる)
- d) 教師は共通テキスト内のターゲット音や単語を板書する。
- e) 子供は共通テキスト内のターゲット単語を囲み、筆記体で綴る練習や発音練習をする。
- f) 内容に合わせて、ジェスチャーや表情、身体を動かしながら文章を全員で音読する。

また本学級では、各自の自由テキストは、「子供が教師に話す→教師が文章にする→文章を元に絵を描いたり作品を作ったりする」という手順で作成されていることもインタビューから分かった。さらに教師が文章にする段階では、子供の言語能力に応じて「教師がすべて書く→指定された一部の単語を教師の書いた下に自分で書く→指定された一部の単語

は自力で考えて書いてみる→教師の書いた全文をなぞる→一人で文章を書く」と5段階で指導しているとのことであった。到達目標は一人一人の子供の言語能力によるが、概ね1年生はアルファベットが書け、単語内の音を理解し単語が読める、2年生は単語の読み書きが正しくでき、文を

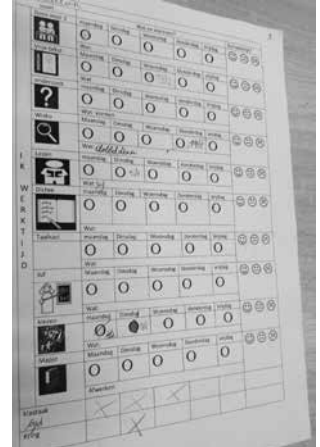


写真5：学習計画表

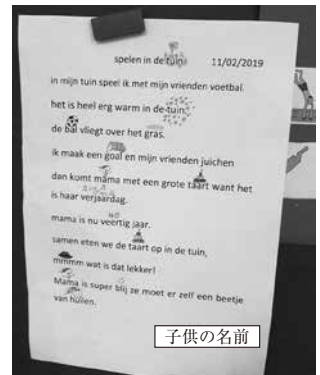


写真6：共通テキスト

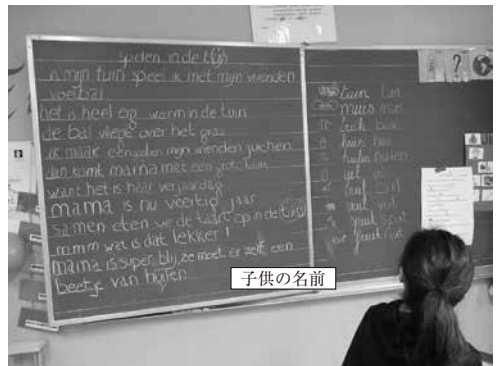


写真7：板書された共通テキスト

一人で読み書きできる、としているとのことであった。

おやつ前の一斉の活動では、デジタル黒板に写した子供向けのダンスを見ながらみんなで踊っていた。教師によると、このダンスビデオは踊り手が動きの指示を出しながら踊っており、言葉と動きを対応させながら自然に動きや身体に関わる単語を覚えられるとのことであった。また、特に1年生は長時間、机に座って1つの学習活動に集中することが難しいため、活動の合間にダンスに限らず、適宜、体を動かす活動を取り入れているとのことであった。

（3）M校の言語指導の幼小接続の特徴

M校の幼児クラスもK校同様、子供が環境の中から自由に遊びを選択し、自己決定した遊びを通して主体的に友達と関わり、考えや思いを表現することを通して言葉を育む方法をとっていた。小学校でも、一人一人の興味・関心や発達に合わせて子供と教師と一緒に活動計画表を作成し、それに基づいて子供自身が活動を決定し主体的に取り組む中で、言語能力やその他の力を伸ばせるように配慮している様子が窺えた。また、自由テキストについてもK校と同じく一斉ではなく、幼児クラスでは主体的な活動の中で子供が絵や製作物など作品をつくった際に、教師がその作品に対する子供の思いを聞き取りテキストに表して自由テキストを作成していた。そうすることで、一人一人の興味・関心や発達に沿って絵や製作物、あるいは文字を用いて自分を表現する意欲や力を育む意図があることがインタビューから明らかとなった。また、小学校でも自分で文字を書ける子供は、学習計画表に基づく課題の1つとして、書きたいことが出てきたときに書けるようにし、主体的に取り組めるようにしていた。一斉の活動であるサークルも、K校同様幼小を通して行い、友達や教師と言葉で伝え合い、学び合い、人間関係を育むことを大切にしていた。このように、自己決定した活動に主体的に取り組むことを幼小共に大切に、サークルや自由テキストなど幼小共通の活動では子供の経験や発達に合わせてその指導内容や方法を変えることで円滑な接続を図っている点でK校と共通するところが多かった。

一方、自由テキストに関しては、幼児クラスでは一人一人の発達に応じて、子供自身の自由テキストを教材にしながらい音や文字を少しずつ学んでいたこと、小学校では選ばれた自由テキストを共通教材として音の理解や文字、単語の読み書きの共通教材として用いるなど、M校では一人一人の言語発達に合わせた段階的ではあるが、自覚的、集中的な言語指導が幼児期から行われていた。M校はオランダ語が母語でない子供が約90%いるため、家庭でのオランダ語の習得の支援が見込めない場合が多く、発達に合わせた指導方法を創意工夫しながらも学校において幼児期から段階を踏んで、着実に言語習得できるように配慮していることが教師のインタビューから明らかとなっており、こうしたことが明示的な言語指導につながっていると考えられる。自分で書いたテキストは身近で、親しみやすく、個々の単語や文の理解よりも内容理解が先にあるためトップダウンの読みができること、また一人一人の自由テキストが共通テキストとなることで、友達や教師に認められ、つながりが生まれるようにとの教師の配慮があり、こうした指導方法の工夫が、子供の安心や自信につながっている様子が窺えた。

5-3. フレネ学校V

(1) 第1生活グループ（2歳半～6歳の異年齢学級）

①好きな活動

好きな活動は、登園後とサークル後に行っていた。登園後は観察できなかったが、サークル後の活動については、レゴやカプラ、お絵描き、ごっこ遊びが見られた。

また、自分の書いた自由テキストの中の冠詞について学んだり、同じ色のビーズの数を数えたり、数字のマグネットを使っ

て計算をしたりしている子供もいた。子供たちがどのように活動を選んでいるか教師に尋ねると、基本的に好きな活動を選んでよいが、カリキュラム⁸⁾に定められた領域（言語、身体教育、算数の導入、ワールドオリエンテーション、音楽教育）に関連する活動については、目標を達成したら評価カードにシールが貼れる仕組みにしているとのことであった。どの活動をいつするか（しなくともよい）は子供の意思だが、活動のバランスが子供に分かるようにシールの色を変えてある。色分けは領域と全く同じではなく本学級では、黄色－言語、オレンジ－生活習慣、ピンク－社会的情動的活動、紫－音楽、白－芸術、緑－算数・科学、青－運動機能としているとのことであった。また今回は観察できなかったが、子供たちの関心事を發展させたワールドオリエンテーションの学習をクラス全体で取り組むこともあるとのことであった。

②サークル

朝の屋外遊びから戻ると、サークルでこれからしたい活動について話し、それぞれ好きな活動に移っていった。サークル中に一言も発しない子供がいたが、まだ入園したばかりのオランダ語の話せない子であった。サークル後もずっとサークル内にとどまっていたが、教師はサークル中も、一人である時も話したり活動したりするように声をかけることはなかった。意図を尋ねると、「この環境に慣れることから始めている。話は聞いているので大丈夫。そのうち遊びだすと思う」とのことであった。その後、他の子供とサークル内でカプラをし始めた。まだサークル外で活動

〔V校 第1生活グループの1日の流れ〕

8：00～8：30 登園し、好きな活動をする。

8：30～9：30 戸外遊びをしながら、フルーツを食べる。

9：30～10：00 サークルで話をする。

10：00～11：30 好きな活動をする。

11：30～12：30 昼食後、屋外遊びをする。

12：30～ 好きな活動をする。（以降、不明）

※午前中、複数のクラスの観察を行ったため、全日の流れについては観察できなかった。一番長く観察のできた1クラスについて、観察と教師のインタビューをもとに、活動の流れを再構成した。



写真8：好きな活動の様子

することは難しいが、徐々に遊べるようになってきているようであった。

③自由テキスト

調査中には自由テキストを書いている場面は見られなかったが、自由テキストを用いて主語の“ik” (=I)、冠詞の“de” = the、“het” = the、“een” = a/anを学んでいる子がいた。Kleuterでも年齢が高いあるいは言語能力が高い場合には、自由テキストそのものは子供の話したことを教師が書き起こすが、それを題材にして文字や簡単な単語、文法を学ぶこともあるということであった。

(2) 第2生活グループ（6～8歳の異年齢学級）

①好きな活動

午後の好きな活動では、各々お絵描きや自由テキストを教師にパソコンで打ち直してもらったり、ブロックをしたりしていた。また、午前中第1生活グループで見かけた子供がクラスにいたため教師に理由を尋ねると、金曜の午後のみ、幼小接続を意図して、第1生活グループと第2生活グループはどちらのクラスで活動してもよいことにしているとのことであった。

②自由テキスト

調査中には自由テキストを書いている子供の姿は見られなかった。自由テキストの扱いについて教師に質問したところ、好きな活動の時間に自由テキストを書いているということだった。このクラスでは、線の引いてあるノートを用いて、アルファベットの形を意識して書けるようにしていた。金曜には、次週の共通テキストとする自由テキストをクラスで検討し、選ばれたテキストは教師あるいは子供自身がパソコンで打ち込んで、好きな絵を描いたり、写真や絵をレイアウトしたりして共通テキスト化するということであった。

〔V校 第2生活グループの1日の流れ〕

- 8：30～9：00 登校後、サークルで話をする。
- 9：00～10：00 言語の学習をする。
- 10：00～10：30 屋外遊びをする。
- 10：30～11：00 言葉と読みのテストをする。
- 11：00～12：00 好きな活動をする。
- 12：00～13：45 昼食後、屋外遊びをする。
- 13：45～15：00 好きな活動をする。
- 15：00～15：30 サークルで話をする。
- 15：30 下校する。

※第2生活グループは14：30から観察を行ったため、観察と教師へのインタビューから再構成した。



写真9：自由テキスト

③サークル

調査時は、教育実習生がサークルを担当していた。この日は、友達との葛藤が生じた時の対応についての哲学的な話し合いを行っていた。

④学校での言語指導と家庭学習とのつながり

本学級のみで見られた言語指導例である。観察をした学級では、「絵本セット」を教師が用意し、家に持ち帰って言葉の学習ができるようにしているとのことであった。子供の関心に沿った数種類のセットがあり、テーマに関連する数冊の絵本とぬいぐるみや指人形、その絵本を通して学べる文字・単語カード、言葉に関するゲームの楽しめるワークシートなどが入っていた。

共通テキストに選ばれた子供の祖母が、孫の自由テキストを用いた絵本セットを作ってくれ、自由テキストを書くことに子供が大変自信をつけた事例もあるという。

(3) V校の言語指導の幼小接続の特徴

V校も、K校やM校と同様に、幼小共通して子供が環境の中から自由に活動を選び、自己決定した活動を通して友達とのつながりを築き、多様な表現と共に言語能力も育つようにしていた。それに加えV校ではOVSGのカリキュラムに則って、言語、身体教育、算数、音楽教育等のねらいを活動や生活の中で楽しみながら達成できるように工夫をしていた。一方小学校では、M校と同様に選ばれた自由テキストを共通テキストとし、フォニックスとも組み合わせながら集中的に言語能力を伸ばせるようにも配慮していた。また、幼小の教室を自由に行き来できる時間も設けて、幼小の円滑な移行を図っていた。

サークルや自由テキストはK校、M校同様、幼小共通しており、内容は発達段階を考慮したものであった。また自由テキストは、幼児期から集中的な言語指導に用いたり、共通テキスト化して一斉活動に用いたりするなど、M校との共通点が見られた。



写真10：共通テキスト

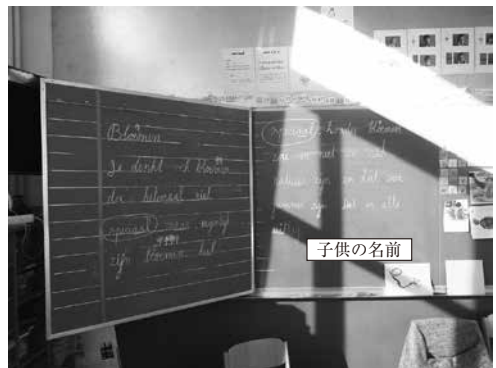


写真11：板書された共通テキスト



写真12：狼の絵本セット

6. 総合考察

6-1. 主体的な活動や学び、幼小共通の言語活動を通じた言語能力の育成

3校共通して、幼小共に好きな活動を自ら選び、実現できる環境が整えられ、自己決定と主体性が重視されていることが明らかとなった。また、主体的な活動や学びだけではなく、サークルや自由テキストのような一斉活動も幼小共通して行われ、内容については幼小で発達段階の違い

が見られるものの、話し言葉や書き言葉による伝え合い、すなわち対話的な学びが大切にされていた。特に自由テキストについては、一人一人の言語能力の発達や興味関心に合わせた「自然な学び方」を大切にしている指導がなされていた。一方で、伝統的なフレネの方法だけでなく、幼児期後半から小学校入門期にかけては、フォニックスや文法の学習も段階的に取り入れていた。しかし、そうした系統的な学習も、自由テキストを用いることで、子供の興味・関心や経験から切り離された学習にならない配慮が窺えた。

6-2. 評価方法の工夫

評価方法を工夫することによって子供の主体性や対話性、学習の自立を促していることも、教師へのインタビューから明らかとなった。

3校とも評価の観点や記録方法は異なるものの、幼児期は①様々な成果物や自由テキストによるポートフォリオ評価、②活動や学びの様子を観察による評価といった記述的評価が用いられ、小学校では徐々に③テストによる数量的評価が追加されるとのことであった。しかし、小学校においても記述的評価が重視されるという。また、子供自身も自分の成長をカードにシールを貼って記録したり、観点ごとに2段階か3段階のチェックリストによる評価を行ったりするなど、自己評価を重視していた。幼小共に重要なのは、一人一人の成長のプロセス評価を教師と子供が共有すること、そして教師はその評価を形成的評価として捉え、次の指導に生かすことを重視していることが、3校の先生方のインタビューから分かった。さらに、期末ごとの面談は子供も交えた3者面談を行い、教師が保護者に評価を伝えるだけでなく子供自身が自分の成長を保護者に説明し、認められたり、課題を自覚したりする経験を大切にしているとのことであった。評価方法の工夫により、子供自身が自分の成長に自覚と自信をもてるようになり、教師も子供が次の活動により主体的に取り組めるように指導を改善することができるということである。

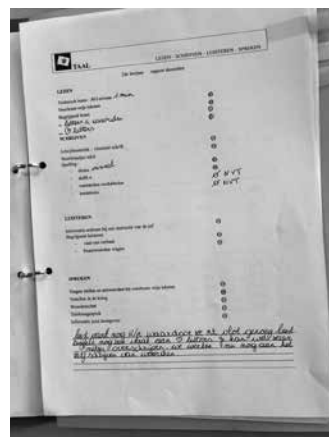


写真13：成績表

小学校以上においても成長のプロセスを記述的に評価することを重視しながらも、客観的なテストも活用し、その両方の評価を次の指導に生かす指導と評価の一体化を大切にしたいカリキュラム・マネジメントが行われていると言えよう。

7. 日本の幼小の言語指導の接続への示唆

フランダースのフレネ学校では、オランダ語の言語指導に関してフレネ教育の基本原則である子供の発達に即した「自然な学び方」を大切にしており、それが結果的に言語指導の円滑な幼小接続につながっていることが示唆された。また、幼小で発達に伴う活動の違いはあるものの、共通して子供の自己決定と、主体的な活動や学びの中で生じる友達や教師とのコミュニケーション

を通した言語能力の育成が大切にされている様子も窺えた。さらに、自由テキストやサークルといった幼小共通の言語活動を取り入れながら、発達に合わせて内容や方法を高度化していくという言語指導の工夫からも円滑な幼小接続の示唆が得られた。音や色、イメージ、身体表現など言語以外の方法によって捉えたことを言葉にする力を育むことが言語能力の向上に大きく寄与する（中央教育審議会、前掲書）と指摘されており、自由デッサンや自由表現とテキストを融合する自由テキストは、これを実現する言語活動となりうるだろう。また、サークルも「主体的・対話的で深い学び」の「対話的学び」に相当する言語活動の1つとして、幼小共通の活動として取り入れることができるだろう。

評価方法についても、フレネ学校の方法は日本の教育に示唆を与えてくれる。日本の幼児教育では、何か特定の知識や技能の習得を求める早期教育の実態や、逆に子供の育ちを観察しているにもかかわらず指導に生かしきれていない実態も見られる。一方小学校においては、単元後にテストを実施するのみで評価を次の指導に生かす形成的評価の視点が薄く、指導と評価の一体化が求められる状況もあり、今回の3校の評価の考え方に学ぶところが大きい。さらに、「主体的に学習に取り組む態度」を評価することが求められている今、子供が自らの成長を自己評価し、評価主体としての経験を繰り返すことで、学びに自覚的かつ自立的になっていけるような配慮も、評価方法改善のための1つの手掛かりとなろう。

また、小学校への子供の引継ぎの在り方についても示唆が得られた。今回調査した3校は幼小併設の学校であり、日本の現状と比較して圧倒的に有利な条件ではあるが、学校の全教師が年に1回、すべての子供の評価について1日かけて会議を行うという取り組みには瞠目した。学校のすべての子供が自分達の子供であるという認識と、一人一人の子供の育ちへの関心の高さが窺えた。幼小接続期の短期的な部分にだけ焦点を当てるのではなく、長期的な視点で子供の育ちを捉え、指導に生かす姿勢を大切にすべきであろう。

8. 今後の課題と成果

各校1日ずつの調査であったため、調査者2名で幼小両クラスを数時間で観察せざるを得なかった。このため、観察できた特定の指導内容や方法については詳しく論じられたが、他の活動についてはインタビューで聞き取った範囲に留まった点が課題である。教育活動の特質に鑑みると、もう少し長期の観察が必要であろう。数名の子供に焦点を当て、その子供たちが何をどのように学び、資質・能力を伸ばしているかを詳細に記述することで、質的ではあるが指導方法の有効性をより客観的に評価することが今後必要となろう。

しかし、校長や担当教諭が1日観察に同行し、質問に応じてくださったことで、各校の言語指導、幼小双方の評価方法を十分に知ることができ、これまで筆者がフランス及びベルギーで調査した他のフレネ学校でも共通して見られた典型的なフレネの指導法について、その意図や方法を観察し、日本の言語指導の幼小接続について多くの示唆が得られたことは大きな成果であった。

謝辞

本研究は2017～2019年度科学研究費補助金（基盤研究(B)課題番号:17H02705）を受けて実施した。調査にご協力くださったフレネ学校の先生方、ベルギーのフレネ教育の発展について情報提供下さったフレネ実践者・カウンセラーのKatrien Nijs氏、そして、全調査のコーディネートをしてくれたフランダースの学校視察官であり良き友人であった故Jan Devos氏に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 子供の自由な表現を学校新聞にし、親への通信としたり、学校間で学校新聞を交換したりする活動（フレネ, 1984）を指す。
- 2) 英語の“Toddler”にあたり、低年齢の幼児を指す。
- 3) 英語の“Preschooler”にあたり、就学前の幼児を指す。
- 4) “Vrije teksten”というフレネ教育の典型的指導法の1つ。日本語では「自由作文」「フリーテキスト」など様々な対訳がある。本研究では『言語の自然な学び方』（フレネ, 2015）に則り、「自由テキスト」とする。
- 5) フランダースのフレネ学校では、描画による自由な表現を“Vrije tekeningen”と呼んでいる。自由テキストは通常、テキストと“Vrije tekeningen”を合わせた全体を指すが、もっと広範な“Vrije expression”（製作物、音楽表現、デジタル表現等）とテキストで表現されることもある。まだ文字を書かない子供たちについては、この“Vrije tekeningen”と“Vrije expression”について子供が話したことを教師が聞き取り、文章化したものを添えて自由テキストとしている。『言語の自然な学び方』では子供の描画を「デッサン」と呼んでいるため、それに則り“Vrije tekeningen”を「自由デッサン」、 “Vrije expression”を「自由表現」とする。
- 6) “Kring”（＝“Circle”）と呼ばれる活動。イェナプラン教育にも「サークル対話」（日本イェナプラン教育協会HP：<http://www.japanjenaplan.org/>）と呼ばれる活動があり、共通性はあるが、今回の3校では円座の形態でも「対話」以外が主目的の活動もあったため、指導法と形態の両方を含んで「サークル」という訳語をあてる。現在、オランダやベルギーでは、フレネ教育とイェナプラン教育は協力関係にあり（オランダフレネ教育HP：<http://www.freinet.nl/>, Rouke Broersma(text) & Freek Velthausz (image) “*Freinet, Elise, de beweging en de freinetpedagogie*”), イェナプラン教育のワールドオリエンテーション（総合的で探究的な学習）もフランダースのフレネ学校のカリキュラムに位置付けられている。
- 7) 音韻意識と文字認識を対応させ、語彙習得や読解力の基盤をつくるボトムアップの指導法。「英語の音声と文字を、多感覚（視覚、聴覚、動作）を用いながら連動させ、個々の音声を正しく識別し、その上で、個々の音声を連結（blending）させるといった操作を通して、単語全体の発音を認識（湯澤美紀・山下桂世子, 2015）」するSynthetic Phonicsが主流である。総合的でトップダウンの指導法である自由テキストとは相対するが、フランダースのフレネ学校では自由テキストとSynthetic Phonicsを融合した指導方法をとっていた。

8) フランダースのカリキュラムを基に、フランダース共同体の教育（Onderwijs van de Vlaamse Gemeenschap）、カトリック教育（Katholiek Onderwijs Vlaanderen）、市町村教育協会（OVSG/Onderwijsvereniging van Steden en Gemeenten）が独自に定めた3つのカリキュラムがある。今回の3校は市町村教育協会OVSGに属する。

引用文献

- 文化審議会（2004）これからの時代に求められる国語力について（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf）
- 中央教育審議会（2016）言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめについて（報告）（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/sonota/_icsFiles/afieldfile/2016/09/12/1377098.pdf）
- フレネ（著）・宮ヶ谷徳三（訳）（1984）手仕事を学校へ 黎明書房
- フレネ（著）・里見実（訳）（2015）言語の自然な学び方 太郎次郎社エディタス
- Jan Devos（2016）*Freinet in Flanders* ECER 2016 Abstracts.
- Jan Devos, Michel Vandenbroeck, Angelo van Gorp（2017）*The appropriation of 'Freinet education' in Flanders* 27th EECERA ANNUAL CONFERENCE PROGRAMME.
- 瓦林亜希子（2018）「すべての子どもを受け入れる教育方法」の日仏における歴史と思想－主体的で協働的な学びを組織するための教育哲学「ピヤンヴェイヤンス」とは？ 北陸大学紀要（44） 17-28.
- 国立教育政策研究所（2015）スタートカリキュラム スタートブック
- 厚生労働省（2017）保育所保育指針 フレーベル館
- Louis Legrand（1993）CÉLESTIN FREINET Prospects: the quarterly review of comparative education 23（1/2） Paris, UNESCO: International Bureau of Education 403-418.
- 文部科学省（2007）言語力の育成方策について（報告書案）【修正案・反映版】（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/attach/1399817.htm）
- 文部科学省（2016）次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/1377051.htm）
- 文部科学省（2017a）幼稚園教育要領 フレーベル館
- 文部科学省（2017b）小学校学習指導要領 東洋館出版社
- 内閣府（2017）幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館
- 岡田啓司（1998）コミュニケーションと人間形成 ミネルヴァ書房
- 岡本夏木（1985）ことばと発達 岩波書店
- Tamara Williems, Hilde Hermans, Katleen Belmans, Evy Brits, Saan Franck, Virginie Sinty, Jeroen Tans, Myriam VERdonck en Lien Wieme（2018）*Kleuter aan het werk : freinet-kleuteronderwijs in de praktijk* In Klaas Mulder, Jimke Nicolai, Katrien Nijs, Jeroen Tans(eds.) Enschede: Donkel & Donkel Drachten

幼児期の教育から小学校教育への言語指導の円滑な接続に関する一考察（吉永・岡本）

湯澤美紀・山下桂世子（2015）英国におけるSynthetic Phonicsの取組：英語学習導入期における教育実践の現状
ノートルダム清心女子大学紀要 人間生活学・児童学・食品栄養学編39（1） 94-106.

（よしながあさと 國學院大學人間開発学部子ども支援学科准教授）

（おかもとひろこ 高崎健康福祉大学人間発達学部子ども教育学科教授）